

「オネエ所長の調査ファイル」 # 2 1

山崎浩治

1

「どうしてあの子たち、あたしのことガン見したのかしら。いまどき女装なんて珍しくないのに」

「こんな世界に一つだけの的な女装、肉眼で見たのは初めてなんですよ」

「あたしは好奇の目にさらされる、みにくいアヒルの子、なのね！　だけど、いつか美しい白鳥になってやる！」

「アヒルの子はアヒル。白鳥にはなれません」

「あら、それは残念」

「それにしても所長と同じ組合の人って、金沢に何人くらいいるんでしょう？」

「さあ。でも1人見たら100人はいる、って言うわよ」

「それ、ゴキブリ理論ですから！」

深夜のとあるコンビニ前で「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とイケメン調査員の透が張り込み中だ。市山はツインテールのカツラにティアラを乗せ、フリルのたくさんついたピンクのワンピースでお姫様をイメージした女装している。その姿は水木しげるのマンガから飛び出てきた妖怪そのものだった。

今回の依頼人は金沢市の会社員・洋平(39歳)である。3年前に性格の不一致が原因で前妻と離婚、一人息子の蓮(12歳)を引き取って暮らしていたが、派遣社員として勤めていた同僚の朋美(28歳)と2年前に再婚。ところが今年中学生になった蓮が夏休みに入り、深夜に帰宅することが増えていく。「息子が外で何をしているか調べてほしい」と依頼を受け、調査を始めているのだ。

コンビニの前では7～8人の少年たちが店内で買ったスナック菓子を食べ散らかしながら車座になって談笑している。そのなかの一人が蓮で、少し前、市山が本人確認するため客を装ってそばまで行ったところ、少年たちの注目を浴びたのだ。

顔色が悪く、小柄な蓮は平均的な中1よりも、発育が遅いようにも見える。表情はあどけなく、まだランドセルが似合いそうな少年だった。頻繁にコンビニ店内に出入りしては買ってきた飲み物やスナック菓子を仲間たちに渡している。そんな光景を見ていた透が「あれはパシリですよ。いじめられてるのかな」と眉をひそめる。市山が言った。

「たかられてる雰囲気はないわ。でも中学生にしてはお金持ちね。彼の外泊や深夜徘徊にはきっと理由があるはず。トオルちゃん、家庭環境も調べておいて」

2

数日後、市山が洋平を呼んで調査結果を報告している。

「息子さんは地元の不良グループに混じってコンビニやカラオケボックス、公園などでたむろしてたわ。ちなみにグループのボスは高校生。息子さんは不良どもの使い走りってとこね」

「……そうですか」

パリッとスーツを着こなし、「仕事ができるビジネスマン」のオーラを発散させる洋平が沈痛な表情で考え込んだ。

「ただし、息子さんの行動は現象面に過ぎない。問題は別のところにあるの」

「非行以外に問題があるというんですか？」

「あなたの家の近所で聞き込みをさせてもらったの。奥さんは近所でも評判の美人だったけど、その奥さんの怒鳴り声がしょっちゅう聞こえるという証言をいくつも得たわ」

洋平の眉間に深い縦皺が刻まれた。

「息子さん本人に聞くと、奥さんは『勉強しなさい』『帰りが遅い』『目つきがムカツク』と言っては、すぐに手を上げるそうよ。深夜まで帰らないのは、あなたが家にいれば叩かれることはなかったから」

「いや、それは……」

何か言いかけた洋平が気まずそうに言葉を飲み込んだ。

「暴力だけじゃない。食事は1日1食。家ではろくに食べさせてもらえないから、給食が唯一のまともな食事だった、って。げっそり痩せた我が子を見て、父親のあなたは何も気付かなかったのかしら」

「私は仕事が忙しいので家のことはすべて妻に任せています。朝早く会社に行き、夜も遅くに帰宅しないから息子と顔を合わせる事がほとんどないんです」

「嘘おっしゃい」

市山にピシャリと言われ、洋平が虚を突かれたような表情になった。

「あなたは奥さんの虐待の事実を否定しなかった。本当は知ってたんでしょ？ その現実を直視できないから仕事に逃げ込み、帰宅がどんどん遅くなっていった。違う？ その証拠に、息子さんの食生活を心配したあなたは、彼に過分なお小遣いを与えていた」

「妻を注意したら虐待がますますひどくなると思ったんですよ！」

「息子さんを見て見ぬふりをするのは、あなた自身がネグレクトしてるのと同じなのよ」

張り詰めていたものがぷつんと切れたように、洋平が両手で顔を覆った。

3

「あんたなんか産まなきゃ良かった。ママなんて気安く呼ばないでよ！」

子どものころ、それが母の口癖だった。よそに女を作った父と離婚後、母は何に対してもやる気が起きないようで布団から起き上がることさえできなくなり、小学生だった朋美が母に代わって家事を命じられた。以来、家事は朋美の仕事となった。

パートに出ても1カ月と続かない母はやがて精神障害の認定を受け、生活保護を受けるようになる。母の気分によって学校に登校できない生活に嫌気がさし、高校卒業後、実家を出る。父の援助を得て、アルバイトを掛け持ちしながら大学を卒業。社会人となっていくつかの職を転々とした後、派遣社員として勤めた会社で洋平と出会い、恋に落ちた。

連れ子のいる男との結婚に不安がなかったと言えば、嘘になる。血のつながらない子どもとう

まくなじめるのか、本当の親のように接することができるのか、不安は尽きなかった。それだけでなくとも朋美は母親からきちんと子育てされたことがない。母親の立場になった時、子どもとどう接したらよいのか分からなかったのだ。

しかも蓮は、家庭に入ってきた朋美をどれだけ経っても「ママ」とも「おかあさん」とも呼ぼうとせず、生みの親をいまでも慕っているのは明らかだった。遊びに出掛けると、わざと洋服を汚して帰ってくる。手間ひまかけて作った料理を残す。声をかけても、目を合わせようとしめない。注意すると、とげとげしい目でにらみ返す。ママ母だと思って、わざと朋美の嫌がることばかりをしているのだ。

そんな蓮と接するうち、やることなすことすべてが癩に障り、イライラが募っていく。洋平のたつての希望で結婚後、専業主婦となったけれど、心を開こうとしない継子と顔を付き合わせているくらいなら、死ぬほど退屈な仕事をしていた方がよほど気楽だった。家事や子育ては一生懸命取り組んでも誰も評価してくれないからだ。

蓮を虐待しているとは夢にも思っていないが、気が付くと怒鳴り散らして、手を上げている自分がある。ろくに食事を作らないのは、どうせ朋美の作った料理など食べようとしめないからだ。自分が腹を痛めて産んだわけでもない子どもの面倒をどうして見なければならぬのだろう。最近はそのことばかり考えている。

4

「何度言っても言うことを聞かない時はしつけとして叩いています。私も親にそうしつけられました。しつけには体罰も必要でしょう？」

洋平を介して市山に呼ばれ、渋々「金沢プライベート・リサーチ」にやってきた朋美が開き直った。市山がうんざりした声で言う。

「体にアザが残るほど殴ったり蹴ったりするのは虐待よ」

「息子に愛情を持っていれば虐待ではないはずですよ」

「彼に愛情を持っていると言うわけ？」

「はい、もちろん」

「あなた、`全日本いけしゃあしゃあ選手権、に出場しなさい。ぶっちぎりで日本代表になれるわよ」

そっぽを向く朋美に市山が言った。

「一度、鏡で自分の顔を見るといいわ。人間って悪いことをしていると人相まで変わるのよ。いまのあなたは鬼みたい。きれいな顔が台無しよ」

「蓮の非行で話があると言うから来たのに。そんなこと、あなたから言われる筋合いはありません！」

腰を浮かせた朋美を市山が制した。

「本題はここからよ。蓮くんは『死にたい』と言ってる。あなたの虐待にもう耐えられない、って」

「継母の私を困らせようとそんなことを言ってるんですよ」

「彼が書いた遺書を預かってるの。もしもこのままあなたが虐待を続け、彼が自殺してしまったら、しかるべき方法で公表せざるを得ないわ」

朋美の頬がはっきりと引きつった。

「言うまでもないけど、遺書にはあなたが彼にした虐待の数々が克明に記されてる。そんな遺書が公表されたら、あなたは一体どうなるかしら」

顔を蒼白にして唇を噛む朋美に、市山が諭すように続けた。

「赤の他人が親子になるのは簡単なことじゃないわ。実の親子のだってうまくいかないことは多々あるんだもの。再婚してできた家族を英語でステップファミリーと言うでしょ？　`ステップ`には階段の意味もあるけど、いまのあなたは踊り場で足踏みしてるだけ。階段を登るように一段ずつ、ゆっくりと親子になっていけばいいじゃない？」

5

その後、蓮の深夜徘徊はおさまり、夏休み明けから何事もなかったように登校を始めた。朋美の虐待も影を潜めたようだ。「金沢プライベート・リサーチ」で市山と透が話している。

「依頼人の息子から遺書を預かったなんて嘘ですよ、所長」

透が尋ねると、市山が舌を出した。

「あれはハッター。虐待の抑止力になってくれればいいと思ったのよ」

「蓮くん、これから平穏に暮らせるといいですね」

ところが1年後、朋美が洋平との間に出来た息子を出産、それからほどなく「蓮を育てる自信がない」と蓮の養育を放棄した。洋平の両親は長兄夫婦と同居しており、蓮の実の母親もまた、再婚して子どもをもうけていたため、蓮の引き取りを拒絶。行き場を失った蓮は児童相談所と協議の末、児童養護施設に入所することになった。

「施設にやるなんて可哀想じゃないですか！」

蓮の去就を聞いた透が怒りをあらわにすると、市山がかぶりを振った。

「子どもにとって親と一緒に暮らすことが幸せだとは限らないのよ、トオルちゃん。結婚しても幸福な家庭が築けるとは限らないようにね」

蓮は児童養護施設に入所したその日、「これでもう意味不明なことで叩かれることがないし、食事も毎日きちんと食べられる」とうれしそうに話したという。蓮にとって施設は家庭よりも安全な場所だったのだろう、と市山は思う。

蓮はいま、施設職員の援助を受けて元気に暮らしている。親子は施設での面会や外泊を繰り返して関係の修復を図りながら、一日も早い家庭復帰の可能性を探っているが、朋美は誕生した息子の育児を理由に頑なに蓮との同居を拒んでいる。洋平も息子の家庭復帰を強く望んでいないようだ。

「みにくいアヒルの子はみんなにいじめられて旅に出たわ。でも、その旅の途中、自分が白鳥だって気付くの。彼もいつかきっと美しい白鳥になる」

市山が祈りを込めてつぶやいた。